

社会福祉士実習教育の効果と課題

～身延山大学で求められる実習指導とは～

檜 木 博 之

はじめに

筆者が身延山大学に勤務するようになって、3年が経とうとしている。この3年間で社会福祉士実習は、平成19年「社会福祉士・介護福祉士法改正」により大きな変化を遂げた。制度の変更から新しいカリキュラムでの実習体系となり、本学においてもその体制を構築する必要性があった。

この動きがある一方で、本学の社会福祉士教育の方向性について、筆者は迷うことが度々あった。本学の卒業生の進路を見ていくと、福祉関係は多いものの、「保育士」「介護福祉士」の資格を活かしての就職になっていた。「社会福祉士」の資格を活かして就職する学生が少ない状況であった。一方で就職活動する上で、社会福祉士実習の体験が大きく影響していることも感じていた。社会福祉士実習での利用者との関わりから、「障害者施設に就職したい」等、就職先が明確になる学生も多かった。このような状況で、本学の社会福祉士実習教育の方向性をどうすればいいのか、どのような福祉専門職を育成していけばいいか明らかにする必要性を感じていた。

本論では、本学の社会福祉士実習教育がどのような効果があったのか、課題は何か、そして本学で求められる実習教育とは何か、を明らかにしていきたいと考えている。

1 就職状況と実習との関係

本学の社会福祉士実習教育の方向性を考える上で、福祉学科卒業生の就

職状況を振り返りたい。

福祉学科が設置されて、平成23年度現在まで3期38人の学生が卒業している。（表1）

（表1） 福祉学科卒業生の状況

	年 度	コース	コース別数	
卒 業 生 数	H20年度	介護福祉コース	1	5
		児童福祉コース	4	
	H21年度	介護福祉コース	8	16
		児童福祉コース	8	
	H22年度	介護福祉コース	8	17
		児童福祉コース	9	
	合 計	介護福祉コース	17	38
		児童福祉コース	21	

そのうち36人が卒業時に就職し、就職率は94.7%である。さらに福祉関係に就職した卒業生は38人中30名で、その割合は実に8割近くに及ぶ。この割合は、他の福祉系大学の福祉機関への就職状況より高いと言える。（表2）本学の学生は、福祉の資格を活かして福祉関係に就職しているのが多いのが分かる。学生が就職先を検討する特徴として、実習体験から考える傾向がある。これは、就職活動での履歴書や就職試験の作文、面接において実習体験から志望動機を言語化する傾向があることから伺える。実習での利用者との関わりから、「私も利用者さんに関わる福祉施設で働きたい」との思いを募らせ、就職先を決定している学生が多いと言えるだろう。

社会福祉士実習教育の効果と課題（樽木）

（表 2） 卒業生の進路先 （N＝38人）

進路先	人 数	割 合
福祉関係	30人	79%
一般企業	2 人	5 %
寺院関係	3 人	8 %
学 校	1 人	3 %
未就職	2 人（1 名本学科目履修生）	5 %

次に福祉関係に就職した30人が、具体的にどのような機関で働いているかを確認すると、以下のとおりである。高齢者福祉機関が多いものの、障害者福祉機関への就職が高いのも、本学の特徴である。これは、本学の社会福祉士実習の実習先は障害者施設が多いから、実習体験が就職に影響していると言える。

（表 3） 福祉関係の就職先 （N＝30人）

就職先分野	人 数	割 合
高齢者福祉	13人	43%
障害者福祉	8 人	27%
児童福祉	7 人	23%
医療関係	2 人	7 %

次に、介護福祉士の資格が取得できる介護福祉コース、保育士資格が取得できる児童福祉コースの進路先は以下（表 4）（表 5）のとおりととなる。介護福祉コースの進路先の特徴は、介護福祉士の資格を活かして高齢者福祉機関が 6 割と多い。高齢者福祉機関で介護福祉士として、介護の現場で活躍している。一方、児童福祉コースは、児童福祉機関、障害者福祉機関への就職が多い。児童福祉機関の内訳は、保育所 6 名、乳児院 1 名である。児童福祉機関は保育士資格が必須だが、障害者福祉機関においても求人

社会福祉士実習教育の効果と課題（樽木）

保育士資格を要件にしている所も多い。このことから児童福祉コースの学生は、保育士の資格を活かして就職している人が多いと言える。

（表４） 介護福祉コースの進路先 （N=17人）

就職先分野	人 数	割 合
高齢者福祉	10人	59%
障害者福祉	2人	12%
医療関係	2人	12%
一般企業	1人	6%
寺院関係	1人	6%
未就職	1人	6%

（表５） 児童福祉コースの進路先 （N=21人）

就職先分野	人 数	割 合
高齢者福祉	3人	14%
障害者福祉	6人	28%
児童福祉	7人	33%
医療関係	2人	10%
一般企業	1人	5%
寺院関係	1人	5%
未就職	1人	5%

本学の就職状況と実習との関連をまとめると以下のとおりとなる。

- ・ 福祉学科は福祉関係の就職が約 8 割。
- ・ 介護福祉コースは高齢者福祉機関、児童福祉コースは児童福祉機関・障害者福祉機関の就職が多い。
- ・ 就職先を検討する際に実習体験が影響している。
- ・ 履歴書作成、就職試験の作文・面接において実習体験から志望動機を

考える学生が多い。

- ・ 社会福祉士として働いている卒業生が少ない。

このように就職状況を改めて確認すると、本学の実習教育が今後の進路に大きく影響すると言える。実習教育に携わる教員として、科目としての実習としてではなく、今後の学生の進路の方向性の視点も踏まえて、実習教育に携わる必要があるのではないだろうか。このような状況の中、本学における社会福祉士実習の役割は何かを考えていきたい。

2 カリキュラム改正と本学の実習体制

平成19年度「社会福祉士法及び介護福祉士法」の改正を受けて、平成21年度からスタートした新しいカリキュラムでの実習体系を確認していきたい。大きな変化としては、①実習指導者要件の厳格化、②実習期間、③実習巡回の厳格化の3点が挙げられる。詳細は以下のとおりである。

① 実習指導者要件の厳格化

社会福祉士実習施設の指導者はこれまで要件が決められていなかった。そのため社会福祉士資格を持っていない指導者が実習指導を行っていた、という施設もあった。しかし社会福祉士の実習の指導は社会福祉士が行うべき、との考え方から、その要件が厳格化された。具体的には、「実習指導者は、社会福祉士の資格を取得した後、相談援助の業務に3年以上従事した経験を有する者であって、社会福祉士実習指導者講習会の課程を修了したものであること¹⁾」となっている。この要件、平成24年3月末まで経過措置が認められているが、平成24年4月以降に適用されることになっている。

② 実習期間

実習期間は180時間以上という要件は変わらないものの「相談援助実習は、相談援助業務の一連の過程を網羅的かつ集中的に学習できるよう、1の実習施設において120時間以上行うことを基本とする²⁾」と一つの実習施設で120時間以上行うことが改めて加わった。

③ 実習巡回の厳格化

実習巡回も同様に厳格化された。「実習先は、巡回指導が可能な範囲で選定するとともに、相談援助実習を担当する教員は、少なくとも週1回以上の定期的巡回指導を行うこと。ただし、これにより難い場合は、実習期間中に少なくとも1回以上の巡回指導を行う場合に限り、実習施設との十分な連携の下、定期的巡回指導に代えて、学生が大学等において学習する日を設定し、指導を行うことも差し支えないこと³⁾」となった。

これらの変化は、現在の日本の福祉ニーズが多様化していることが影響している。社会福祉士は多様化した福祉ニーズに対応していくだけの知識・技術が求められるようになった。このことから「実践力の高い社会福祉士を養成する」必要が出てきたのである。「実践力の高い社会福祉士」を養成するために、実習教育においても実習指導者の要件の厳格化などカリキュラムを変えていく必要性が出てきたのである。

このような動きの中で、本学の社会福祉士実習はどのような状況なのか。社会福祉士実習について、これまで学生から、以下のような課題が挙げられていた。まず実習に行く前の学生からは、

「社会福祉士の実習で何をするのか分からない」

「介護実習や保育実習と何が違うか分からない」

「何を学ぶか分からないので、目標が作れない」

などである。

実習を終えた学生からは、

社会福祉士実習教育の効果と課題（櫛木）

「社会福祉士が何をしているか分からなかった」

「社会福祉士が誰か分からなかった」

「社会福祉士の国家試験を受験するか分からない……」

などの声が聞かれていた。学生にとって、保育実習、介護実習よりも社会福祉士実習で何をするのか、社会福祉士が何をするのかが分かりにくいと感じている。これらの課題は、社会福祉士がいない施設で実習した学生に多く聞かれた。そのため今回の新しいカリキュラムにおいて、社会福祉士が実習指導者になるので、「社会福祉士が見えない」実習は解消されることとなる。学生が社会福祉士と間近で接することができるので、社会福祉士がどのような役割を果たしているのかという「社会福祉士像」を形成することができるだろう。

一方で、より「社会福祉士としての実習」という意識が求められるので、これまで「社会福祉士の国家試験を受けるか分からないけど、実習に行く」という「体験としての実習」を行うことが出来なくなったと言える。社会福祉士実習が、「福祉専門職」を養成する実習から、「社会福祉士」を養成する実習へ変化した。これまで本学の実習は、資格を前提としない「福祉専門職」養成としての実習という意味合いが強かった。しかし「福祉専門職」ではなく、「社会福祉士」を養成する実習へシフトしていくことが求められるようになったのである。

この状況から、本学の社会福祉士実習教育体制は、カリキュラム改正に応じて以下のとおりとなった。

（表 6）身延山大学社会福祉士実習体制

① 実習時間		
実習Ⅰ	2年生時春休み	8日間（60時間以上）
実習Ⅱ	3年生時夏休み	15日間（120時間以上）

② 実習巡回体制	
1 週間に 1 回	
実習Ⅰの巡回指導	1 回
実習Ⅱの巡回指導	3 回
③ 実習登録施設 14施設	
内訳	
障害者支援施設	8 施設
障害児施設	1 施設
老人デイサービスセンター	1 施設
在宅介護支援センター	1 施設
児童相談所	1 機関
社会福祉協議会	1 機関
医療機関	1 機関
④ 実習の流れ	
2 年生前期	相談援助実習指導Ⅰ
2 年生後期	相談援助実習指導Ⅱ
2 年生春休み時	相談援助実習Ⅰ
3 年生前期	相談援助実習指導Ⅲ
3 年生夏休み	相談援助実習Ⅱ

次章では、本学の社会福祉士実習教育の具体的プロセスを確認していきたい。

3 本学の社会福祉士実習教育のプロセス

① 事前指導

実習前に行う事前指導（相談援助実習指導）のシラバスは以下のとおりである。

- | |
|---|
| ①相談援助実習の意義について理解する。 |
| ②相談援助実習に係る個別指導並びに集団指導を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際に理解し実践的な技術等を体得する |

社会福祉士実習教育の効果と課題（檜木）

- ③社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。
- ④具体的な体験や援助活動を、専門的援助技術として概念化し理論化し体系立てていくことができる能力を涵養する。

厚生労働省 平成20年3月28日「大学等において開講する社会福祉に関する科目の確認に係る指針について」

本学の事前指導において、重視していることは、「社会福祉士実習」のイメージが持てるようにすることである。具体的な授業内容では、実習に行く前に、「実習施設の実習指導者（社会福祉士資格取得者）の訪問授業」「社会福祉士実習を体験した上級生との意見交換」を行っている。これにより実習施設の実習指導者の話や、既に社会福祉士実習を経験した上級生から実習について生の声を聞くことができる。更に学生から実習への心構えや事前に準備すること、実習への不安などについての質問も出て、お互いに意見交換ができる場となっている。このような授業を行うことで、社会福祉士実習でどのようなことを行うのか、社会福祉士が福祉現場でどのような役割を果たしているのかが、実習前にイメージできるようになる。

② 巡回指導

実習中の巡回指導は、先に述べたように週1回の頻度で行っている。実習Ⅰは8日間なので1回、実習Ⅱは15日間で3回の巡回指導を行っている。本学における実習巡回の目的は、以下のとおりである。

（1回目の巡回指導）

- ① 実習目標に沿った実習が行えているかの確認。目標に沿った実習が行えていない場合、目標の変更を実習生と実習指導者、養成校教員の3者で検討する。

- ② 実習日誌の書き方の指導。実習日誌の記入で実習生が迷っていないか、実習目標に沿った記述になっているか等を確認し、書き方を指導する。
- ③ これまでの実習で学生がどのような感情を抱いているのか、気づいたことがあったかの確認。
- ④ 実習の「逆機能」が起こっていないかの確認。
- ⑤ 今後の実習課題を学生と実習指導者、そして教員で共有し、2回目の巡回の目的を明確にする。

（2回目以降の巡回指導）

- ① 1回目の巡回で明らかにした実習課題について、その後の経過を確認する。
- ② 実習目標がクリアできているか、出来ていなかった場合その原因は何かを明らかにする。
- ③ これまでの実習で学生がどのような感情を抱いているのか、気づいたことがあったかの確認。
- ④ 実習の「逆機能」が起こっていないかの確認。
- ⑤ 実習中に出てきた新たな課題を明らかにし、実習後の指導につなげる。

実際には一度の巡回で①～⑤の全てを行うことはできないことが多い。しかし養成校の教員として、巡回時にはこの目的を常に意識している。この中でも特に意識しているのが、「実習目標」と「学生の様子 の把握」になる。

「実習目標」は、個々の学生が事前にたてた実習目標に沿った実習が行っているかどうかの確認である。これまで筆者が実習指導を行ってきた体験から、実習目標が明確な学生は、実習から多くのことを学んでいると感じている。一方で実習目標が曖昧なまま実習を行う学生は、体験のみで終わってしまい、学びも少ない傾向にあるという印象を持っている。だからこそ、巡回の時に学生が事前にたてた目標に沿った実習が行われているか、実習指導者も交えて確認するようにしているのである。

「学生の様子」は、巡回指導の目的③④が中心になる。④の「逆機能」とは、実習中に「現場への失望」「現場実践への失望」「実習指導者に相談できない事態」「ハラスメント各種」などを体験し、実習に対してマイナスの感情を抱くことである⁴⁾。学生は実習中に、さまざまな「傷つき体験」をする場合がある。そもそも実習に行く前から、大きな不安を抱えている。その不安やマイナスの感情を教員として早く理解し、今後の実習に向かっていけるよう支援する必要がある。

では学生が実習巡回に対してどのように感じているか。学生の声として以下のようなことが挙げられる。

- ・「話しやすい人が来て良かった」
- ・「緊張が続いていたが、巡回時にホッとすることができた」
- ・「(教員と) 実習の悩みを共有したかった」
- ・「(教員と) 二人で話す時間がほしかった」
- ・「1 回目の巡回のほうが話がしたい。1 回目に時間をとってほしい」

などである。このように学生は実習中、多くの不安を抱えており巡回に来た教員と「話したい」という思いを持っていることが分かる。それに応じるために、教員は話しやすい雰囲気を学生に伝えていく必要がある。巡回をとおして学生の不安を軽減し、利用者に向き合うことのできる実習にするために、巡回の役割は大きいと考えている。

③ 事後指導

実習終了後の事後指導は、(1) 実習報告会、(2) 評価表の確認（自己評価と他者評価の比較）、(3) 教員との実習スーパービジョンの3つを行っている。

(1) 実習報告会

実習Ⅰ、実習Ⅱの両方で、終了後に行っている。実習Ⅰは、5月頃に実

習指導Ⅲの授業の中で行っている。実習Ⅱは、10月に介護実習、保育実習と共にしている。いずれも実習での体験を振り返り、自らの課題を明確にして言語化し、他者に伝えることを目的としている。

（２）評価表の確認（自己評価と他者評価の比較）

実習評価は学生自身と実習指導者の両方が行う。学生と実習指導者が記入する評価表のシートは、共通の内容である。これにより学生自身が行う自己評価と実習指導者が行う他者評価の比較を行うことができる。学生が自分で行った評価と実習指導者が行った評価を比較することで、自らの能力や課題に気づくことができるのである。

（３）教員との実習スーパービジョン

実習終了後、教員と学生の２者面接を設定し、実習後スーパービジョンを行っている。実習日誌を使い、実習での体験を振り返り、その時にどのように感じていたのか、考えていたのか等を確認するようにしている。そして学生自らの課題を明確化し、今後の実習や就職につなげている。

４ 実習教育の成果と課題

社会福祉士実習の効果について、学生の実習日誌の記録から見ていきたい。学生が実習で利用者と関わることで、さまざまな気づきを得ている。

児童養護施設で実習を行ったＡさん

「私自身が傷つくのが嫌だから、嫌われたくないから見て見ぬふりをしてしまっていたと気づいた」

障害者支援施設で実習を行ったＢさん

「意思疎通を図るには一方通行ではなく双方向でなければ成立しないことを改めて学べた」

障害者支援施設で実習を行ったＣさん

「利用者のことをもっと知りたい、利用者のために力になりたいと

「いう思いがあれば、相手にも伝わり、受け入れてもらえることを知った」

障害者支援施設で実習を行ったDさん

「様々な悩みや葛藤を抱えている利用者に対して、何もせず話を聞くだけでも良い、ということに気づいた」

在宅介護支援センターで実習を行ったEさん

「何故、地域に住むのか。利用者にとって利便性より重要な『その時』がある。それが地域に住む背景の一つなのかもしれない」

このように学生が実習をとおして、利用者との関わりの中でさまざまな気づきを得ていることが分かる。巡回に行った時にも、学生が「利用者さんに何もできない自分」にジレンマを感じて涙するという場面が何度かあった。実習施設の利用者と向き合うことで、自分自身の課題に直面し、葛藤しているのである。このような気づき、考える力は、学校の中の授業では得ることが出来ない、実習教育の醍醐味と言える。このような体験をとおして「人を援助することとは何か？」という「福祉専門職」としての本質を考えるきっかけになっているのである。社会福祉士実習教育が、今後、福祉現場で福祉専門職として働くようになる学生にとって、貴重な学びの場となっているのである。

一方で、課題も多いと感じている。新しいカリキュラムの中で、「福祉専門職」ではなく「社会福祉士としての実習」が求められている中、本学の場合「社会福祉士」として就職する学生が少ない現状がある。この状況は、「社会福祉士」を養成しなければならない実習にもかかわらず、「福祉専門職」の養成に留まっていると言えるのではないだろうか。本学の社会福祉士養成教育は、これまでの就職の実態に合わせた福祉現場で働く「福祉専門職」の養成に留まっていいのだろうか。そうではなく「社会福祉士」を養成して、「社会福祉士」として福祉現場に送り出す使命が本学にもあるのではないだろうか。では、そのためには現状のままではなく、どのよ

社会福祉士実習教育の効果と課題（檜木）

うな社会福祉士養成の教育体制を構築していくのが大きな課題であると
感じている。

おわりに

本学の福祉学科が今後発展していくためには、「学生の世代間教育」が
不可欠ではないかと考えている。「学生の世代間教育」とは、本学を卒業
した卒業生が、福祉現場で実習指導者として本学の学生を指導すること
である。本学の卒業生が、社会福祉士の資格を取得後「社会福祉士の実習指
導者」として、本学の学生の実習指導を行う。これが実現していくことに
より、現在学んでいる学生が「社会福祉士」を身近に感じ、「社会福祉士
像」をイメージできるのではないだろうか。

「学生同士の世代間教育」が実現できるよう、今後も社会福祉士養成
教育を行っていきたいと考えている。

文献

- 1) 厚生労働省 平成20年3月28日 「大学等において開講する社会福祉に関する
科目の確認に係る指針について」
- 2) 同掲
- 3) 同掲
- 4) 「相談援助実習指導・現場実習 教員テキスト」社団法人日本社会福祉士養成
校協会編 中央法規出版 P95